

「近代詩歌早稲田四人展」回顧

去る七月十一日(土)、午後一時より京王プラザホテル四十

二階「富士の間」で、服部嘉香先生を偲ぶ会が催された。詩雜

誌「四世紀」同人で、先生の教え子(世話人代表原子朗先生)

を中心に、関係者多数が集り盛会であった。出席されたお顔触

れは、「四世紀」同人のほか、窪田章一郎、佐藤輝夫、辻村敏

樹、武川忠一、篠弘の諸先生、「四世紀」の装幀画を描き続け

てこられた利根山光人、詩人高田敏子、西条嫩子の各氏など、

およそ八十余名。図書館からも深井、鎌倉、後藤、忠平と私の

五人が出席、諸事裏方をお手伝いした。昨年近代詩歌早稲田四

人展 生誕一〇〇年―革新期のバイオニアたち 北原白秋・若

山牧水・土岐善麿・服部嘉香―(十一月十日〜十五日於日本

橋丸善 日於名古屋丸善)を、図書館主催で行ったが、その折の担当者

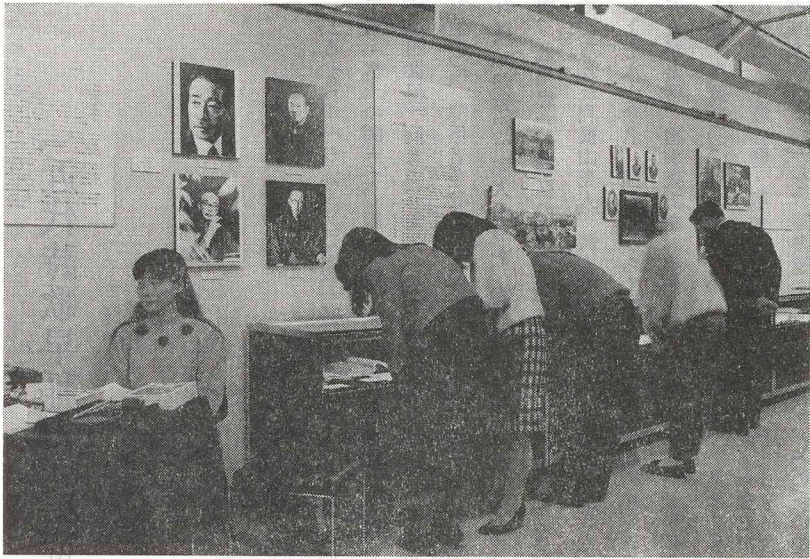
「近代詩歌早稲田四人展」回顧

尾形国治

であった縁による。

これまで、図書館主催でさまざまな趣向の展示会が行われてきた。が、館蔵の貴重書の類や早稲田の小説界を中心とした作家作品展の範囲を出なかった。早稲田文学の詩歌部門に的を絞ったものは、「四人展」が初めての試みであり、企画の狙いも担当スタッフのいささかの意気込みも、そこにあったと記憶する。当初の不安と気遣いは結果として徒労に終り、日本橋・名古屋とも盛会裡に楽日を迎えたことは、何としても嬉しいことであった。

いま、あの日の展示へ向けて準備に取り掛かった時のことを思い出す。本格的に動き始めたのは七月、夏休みに入ってからであった。連日の猛暑。そんな中での作業は決して楽ではなか



った。しかし、不思議なことに辛いこと、苦しいことは奇麗さ
 っぱりと忘れてしまい、いまは楽しい思い出だけが蘇る。白秋
 の処女出版で、手造り本（表紙にトランプのダイヤのQをデザ
 インした自装本）を、そっと掌中にした時の感触。扉を繰り
 「わが生ひ立ち」（序）を黙読した時の静寂の瞬間。そして文
 中の「畢竟自叙伝として見て愆しい一種の感賞史なり性愆史な
 りに外ならぬ」という一文に鮮烈な印象を味ったことなど。独
 歩の影響下に、武蔵野を、自然をこの上なく愛し、酒と旅を生涯
 の友とした漂泊の歌人牧水。その無名時代の『海の声』（第一
 歌集）の荒削りの瑞々しい恋愛歌の数々。『NAKIWARAI』の
 単純素朴な装幀とローマ字短歌の形式に見せた善磨の想外な大
 胆さと斬新な試み。そしてまた詩論家嘉香の敵愾な風貌姿勢の
 背後に流れ続けていた豊かな詩情性との出会いは詩集『幻影の
 花びら』や『鏘朱の影』などの書中においてであったことなど
 ——いずれも私の記憶をいまも鮮かに彩ってくれている。

四人の詩歌人たちの出発時期は、いずれも自然主義文学の勃
 興期と重なる。自然主義の思想が、知に囚われた過去の観念的
 呪縛から文学を解放する過程で、多くの青年男女を俘虜にした
 が、四人の詩人たちもその例外ではなかった。共に憑かれた者

